

『いつもイエスさまの様に』  
私を向かわせたもの』

マリア テレース 酒井 喜美子

私は神道の教会の家で育ちました。小さい頃は、いろいろな行事や信者さんの話など、柏手を打って拝むことをしていました。そんな私が何故カトリック信者になったのでしょうか。我家の祖父は神官の様なことをしていましたし、自然や八百万の神がいて、その心を大切にしていました。でも、祖父も父も宗教とは個人の自由を尊重すべしと言うことで、また父が聖書を持っていたこともあり、幼い頃の私は難しいと思いがちも、聖書に出てくる話のイエスさまの様に生きられたらいいなと漠然と思ったものでした。教会に関心をもち、母に話すと、行きたいと思う人が来られるように、教会はいつも開かれていると聞き、小学校から帰ると誰もいない教会に行ってみました。言葉では言い表せないけれど、心から落ち着く所と思っただけです（我家の神殿は、暗くて冷たくて、ちょっと怖いと思っただけでしたから）。小学校三、

四年くらいに、この城北橋教会（聖心教会）で、シスターの置物をお小遣いで買いましたが、後にその置物の人が四十代で洗礼を受ける時の自分の名前になるとは、本当に不思議です。

やがて短大生（聖公会のミッシヨンスクール）となり、この二年間はとても充実した生活をしていました。でも自分の家とは宗教が違っているので、自分ひとり信者になると言うことはまったく考えていませんでした。そんな私も年頃となり、結婚することになり、相手のお父様の本家はお寺という、また異宗教との巡り合わせでした。でも、私の心はいつもイエスさまの様に生きたい・・・がありました。そして子供をお腹に宿すと、すぐに流産し、次におめでたと分かった時は入院しなさいと言われていたので、分かれると同時に入院し、ちょうど主人と私が結婚する少し前に、偶然見つけた聖母マリアのペンダントを買ってもらっていたので、それをいつも身につけていました。そのお陰もあって無事長女を出産しました。

その後、長男の時も五ヶ月過ぎるまで病院にいた私は、同室につきわりのとてもひどい人がいて、ある時、医師に「お腹の子を取るか、自分を取るか」と言われたそうです。通常は五十三キロあった体重がその時には三十九キロになってしまったとのこと。私は自分の首にかかっていたマリアさまのペンダントを「あなたとお腹の赤ちゃんを守って下さるわよ、きつと・・・」と、彼女の首にかけてあげました。私は退院し、彼女とはあわなくなつたのですが、長男の二ヶ月検診に行った時、偶然大きなお腹の元気な彼女の姿を見ました。そしてしばらくして、彼女から元気な赤ちゃんを産んだという知らせを受けました。

主人からのプレゼントを黙って彼女にあげてしまいました。そこにはもつとすばらしい神様のプレゼントがあつたのです。後で主人に謝ろうと話をすると、怒るどころか、良いことをしたと喜んでくれました。そうして私のイエスさまの様に生きたい・・・の心は一層強くなつていったのです。

今思うと、私が教会に通うきっかけを作ってくれたのは娘だったのかもしれない。いつも神様からの意図は良いことと悪いことがセツトです。悪いと言つても、それは人間がそう思うのであって、神様からは、すべて「よし」とされることでしょうか・・・。娘は高校に入り一年余りで不登校となり、学校を辞めてしまいました。その後、自由を手に入れたと遊びまわつて、私は心配のあまり右耳の聴力を一時失つてしまったのです。この時は悪いことに主人の単身赴任が重なっていました。私は自分を責めたり、この子の将来はどうなってしまうのだろうかと思ひ悩みました。

でも、一緒にスタートを切つたら、必ず一緒に終わらなくてもよいこと、休んでもいいし、結局、学校とは違う選択肢があることも教えてもらいました。ちょうどその頃、インドネシア人のシェハダさん家族と知り合いになり、日本滞在中に病気になることもあつて、私たち家族が出来ることを手伝いたいと思つたことが絆をもつと深めることになりました。